

史料1
加沢記

景泰□代孫上野介景康代に至り、長禄二戊寅年利根薄根両川の落合の岸当郡惣鎮守武尊明神宮社場当国無双の地たるに依て、社人□□宮□高井但馬を招、城を築かん事を請給ふ、扨明神の社は根岸に御建立有て城郭に築給ふ、此石を指べけがれければ殺生石と世の人申あへり、

史料2
平姓沼田氏年譜略

永禄二己未年正月二日、夢想の事在于当城不吉たりとて、同年三月吉辰をえらひ、十五日同所ノ原乾に当り、武尊・天神之社地四神相応之城地なり□、薄根に社地を開発し両社と榛名を奉移三社を一社に勧請し社跡の東南門扉堀をかまへ星名曲輪と号、又東南に三之丸を巽に無量蔵を乗込蔵物小路と号、
同三庚申年四月、移徒す、本城之良に当り知徳寺を引移今三光院是なり、丸之外に町を割

東材木町

南本町

西鍛冶町

用水之普請始る、用水役人

塩野井主水
長谷川主計

白沢を堀通し、根岸之人家を引移し、同所正覚寺を鍛冶町に移し、根岸之旧例四九六才之市立候所、九之市凶事多く依之同五壬戌年正月より四八之市を立申候、

史料3
沼田根元記

城主頭泰ある夜の夢ニ三星連城中ニ落テ巴ニ喰合然而滅スト見テゆめさめたり、此夢あやしきおもひ僧ヲめしよせうらなわせしむる、丑寅の方より当城□悪ましやうげをなさんとほつす、是ヲ退ケンならば旦今乃城地御かへ丸之内ニ三星祭り込置ならバ其子細アリ間敷ト申上ル、頭泰其儀尤成リとて其用意ヲそなされたり、幕岩城より南西の間に当テ当国無双之城地有リ、三峯山雲ニ高ク其間遠望して荒川後ニなす、右ニハ利根の大川を控へ万丈之岩□□として苔なめらかに岩石けわしく前わ弘くとして平地なりたり、遠望大山後脚として是ニ坂道アリ、後ニハ寺窪川下薄根なかれ、前ニ遠望笠科川、誠ニ四神相応之城地なりとて三光院住持良真ニ被仰付吉□おゑらみ、社領として永三貫文の所ヲ寄附せられ、諏訪大明神之社ヲ薄根ニ移シ□明神武尊明神天満宮右三社も此所ニ移シ奉ル、是根岸□上なり、此所ニ城地定メ、地まつりして東南ニ堀ヲ廻し門扉ヲ囲ミニ之丸ヲひらき三星を祭りこめて無星曲輪ト名付ルナリ、三之丸ヲ發て本城より□ニ当テ無量の宝蔵を發納て蔵内かくしと名付、享禄三庚寅年春三月十五日城普請初メ三年目に四月成就して□移祝儀相済、是則沼田毘名野原鞍打之城ト申也、

史料4
上杉憲房書状写 武家事紀

御上洛之路次如何無御心元候、抑一心院事、大概無相違相調候処、(中略)
白井二候処、長尾左衛門入道伊玄起逆心、彼同名六郎致一味、沼田之庄内
工打入、号相俣地二令張陣候間、今二有此方二取向候、古河様無御余儀建
芳毛無等閑候間、(中略)
(永正七年)
八月三日
上乗院御同宿中
(上杉)
藤原憲房在判

史料5
元昶(長尾顯景)書状 上杉家文書

就沼田之義、先度令啓候き、慙骨肉事候上、於今度者、中務大輔落度之義
無之候、発智越前守連々对中務大輔、慮外之儀共無其隱候、
何篇可然様御刷、於元昶可忝存候、仍平五所へ給候大鷹、如御書中逸物
候、早々雁二三合申候、羨由申迄候、将亦、為鷹持奥口へ御超之由承及
候、可様之時分參、致御供度念願候、委曲期後音候、恐々謹言、
(享祿四年力)
十月廿一日
知竜斎
元昶(花押)

(為景)
長尾信濃守殿

史料6
正木時茂書状写 歷代古案卷五所収

就敵(北条氏) 久留里張陣、御越山之儀申入候処、早速去月上旬被進御旗、明(安中)

(東吾妻町)
間・岩下・沼田之城被攻落、爲始北条孫次郎、宗者数百人被打捕、
(長尾憲景)
白井・惣社・簀勾柵望之段風聞、目出度奉存候、時茂年来之願望此
時候、然間、関東御静謐不可移時日候、弥以被廻御計策、急度御落着簡要
候、兼亦、去年御上洛之砌、從公方様裏書御免候哉、奉得其意候、巨細
猶口上申含候、此由可得御意候、恐々謹言
(足利義輝)
(三)
「永祿二ノ状」

十月二日
越府人々御中
(正木)
時正

史料7
遠山康英条書 上杉家文書

覺
一、此度以使僧、氏康父子証文可被進置候由事
一、相・甲御対陣間近間、御弓矢火急候、同者、越之御人数早々被打出、
沼田御在城衆ハ、青戸(大目)・岩櫃筋へ被上火手様、念願被申候、此方之人数
ハ自其方随御作意可被及行事
一、彼飛脚、来十四、五可致帰路歟、十六、七二拙者親子之間、金山迄
可被指越由、内儀候、御両所於半途有御対談、可被仰合歟、燃者御日限
可蒙仰事
以上

(永祿十二年)
二月二日
遠山新四郎
康英(花押)

松本石見守殿
河田伯耆守殿
上野中務少輔殿

史料8
上杉景勝書状 米沢市 上杉博物館所蔵

如註進者、猿ヶ京江自倉田相働之由申越候哉、因茲、雖無申迄候、両口之備肝要二候、扱又、半途迄茂人数從其庄出可然候哉、何茂談合二候、左様二候者、半途人数指越尤二候、定而敵為差儀有之間鋪汲量候、「重而堺目模様具可申越候、扱」承届分者、其地一向普請不申付候由、万々油断口惜候、昼夜無油断普請等可申付候事、肝要候、境目江目附差越、様体聞届、註進肝要候、猶吉事待入候、謹言

天正六年

五月十八日

深沢刑部少輔殿

景勝（花押影）

史料9

北條氏政書状写 武州文書所収 埼玉郡與右衛門所蔵文書

昨十七沼田之口落居、當手之者本城へ相移由、夜中申来候、為其致言上候、乍恐御心安可被思召候、此旨可預御披露候、恐惶謹言

七月十八日

左京大夫氏政（花押）

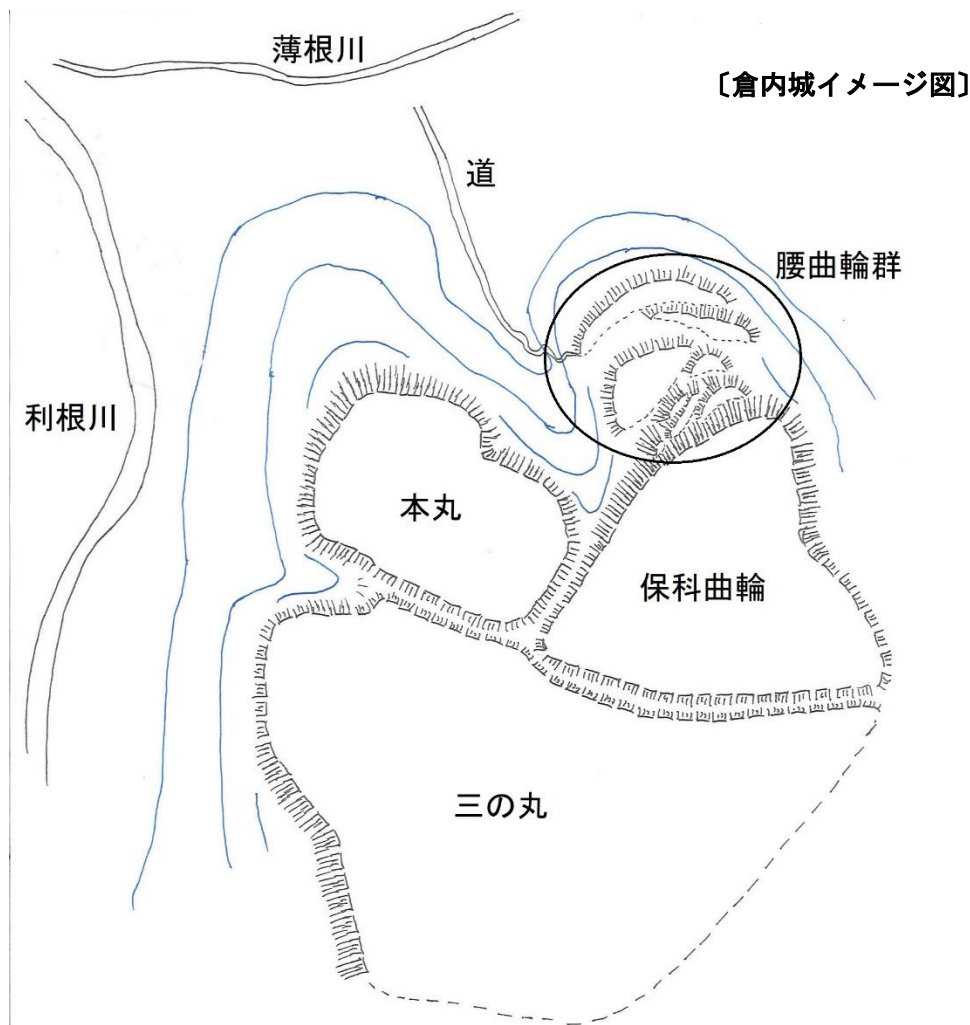
進上 築田中務太輔殿

史料10
武田勝頼判物写 加沢記所収文書

沼田へ数年雖相働、其方堅固相抱候條、年月相過候處ニ、今度以忠節倉内之城明渡、殊同名彦助・吉田新介等令追放之由、委曲真田處より以真下令注進、神妙之仁に存候、仍為忠賞、利根川東部三百貫文之處、全可被知行候、猶依戰功可被加重恩者也、仍如件

天正八年庚辰六月晦日

勝頼御在判



藤田能登守殿